

# 逆接の“倒”再考

宇 都 健 夫

## 1. はじめに

副詞“倒”は、複文後節における逆接を表す用法をはじめとして、非常に多様な意味・用法を持つ語である。そのうち重要な意味・用法の一つは、以下のように複文の後節に用いられ、前節に対する逆接的な内容を表すものである。

(1) 没吃药, 这病倒好了。(吕叔湘主编 1999:153)

(薬は飲んでいないのに、病気はよくなった<sup>1)</sup>。)

(2) 房间不大, 陈设倒挺讲究。(吕叔湘主编 1999:154)

(部屋は大きくないが、家具はなかなか凝っている。)

本稿はこのような“倒”を包括して「逆接の“倒”」と呼ぶ。逆接の“倒”は典型的には複文の後節に用いられるが、以下の例(4)のように複文後節に相当する文に用いられる場合もある。

(3) 龚站长不常有信来, 倒常托人带下一大包一大包的羊毛。

毕淑敏《君子于役》

(龔駅長はあまり手紙は寄越さなかったが、しばしば人にウールを詰めた大きな袋を1つまた1つと持たせた<sup>2)</sup>。)

(4) 孙国仁急了, “我们是来吃饭的, 打你一顿算是怎么回事?” “饭是没有。”老板沉着地说, “命倒有一条。” 王朔《千万不要把我当人》  
(孫国仁は苛立った。「我々は飯を喰いに来たんだ、あんたを殴ったところでどうなると言うんです。」「飯はない。」店主は落ち着き払って言った、「だが命ならここに一つある。」)

(8)

また、複文の前節および後節に逆接を表す接続詞が共起する場合もある。但し上掲の各例からも明らかなように、それらの共起は必須ではない。

(5) 虽然只是四个人，可是他们的声势倒好象是个机关枪连。

老舍《四世同堂》

(たった四人ではあったが、しかし彼等の氣勢は機関銃を連ねたか  
のようだった。)

逆接の“倒”はまた、以下のように条件表現の帰結節に用いられる例も見られる。

(6) 要是不升帐问案倒会好些，在自己家里，有红线作帮手，想怎么打就  
怎么打，不容这小子不说实话。 王小波《青铜时代之万寿寺》

(もし会議を開いて尋問しないのなら、かえってそのほうが良いか  
もしれない。自分の家なら紅線が手助けしてくれて、殴りたいよ  
うに殴って、この小僧に本当の事を言わずにはおかない。)

(7) 红线觉得这是个好现象，人被整以后，长久的晕迷不是件坏事。倘若  
立刻醒来，倒可能是回光返照。 王小波《青铜时代之万寿寺》

(紅線はこれは良い現象だと思った。人が刺されてから長い間意識  
を失うのは悪いことではない。すぐに意識を取り戻したら、それ  
は逆に消える前の灯火かもしれないのだ。)

これらの例からは、“倒”による逆接が接続詞を用いたものとは異なり、  
独自の特徴を有することが伺われるであろう。

逆接を表す“倒”については、これまでの先行研究によって様々な考察が  
なされてきたが、なお未解決の問題を少なからず残している。本稿では、先  
行研究の検討と事例の観察を手掛かりとしながら、改めて逆接の“倒”に關  
する問題点の考察を試みたい<sup>3)</sup>。

## 2. 二種類の逆接の“倒”

幾つかの先行研究や工具書において、逆接の“倒”を二種類のタイプに分  
類する事が提案されている。森中 1998 は、逆接の“倒”を“反而”との互

換の可否という点から“倒1”と“倒2”とに分け、両者の相違点を以下のように述べている（森中 1998:53）。

“倒1”は反対の意味が軽く、“反而”に置き換えられない（例（8））。

“倒2”は反対の意味がはっきりしており、“反而”に置き換えられる（例（9））。

（8）房间不大，陈设倒挺讲究。（吕叔湘主编 1999:154、森中 1998:55）

（部屋は大きくないが、家具はなかなか凝っている。）

（9）春天到了，天气倒冷起来了。（森中 1998:52）

（春になったのに、逆に寒くなってきた。）

森中氏の提示するような分類は、郭志良 1999:60, 314-319 や《现代汉语词典》のような工具書にも見られる。また、吕叔湘主编 1999 は、例（8）のような“倒”と例（9）のような“倒”とに別々の解釈を示している。即ち、前者は“表示转折（逆接を表す）”ものであり、後者は“表示跟一般情理相反（一般の事情・道理と相反することを表す）”ものであるという<sup>4)</sup>。

上掲のような分類は、確かに一考に値するものである。しかし、両者の差異を単に「反対の意味がはっきりしている」かどうかという点で区切るのは些か単純であろう。両者をめぐっては、より多くの重要な差異があるものと思われる。本稿では以下、それぞれの“倒”とそれが用いられる文の特徴について改めて考察してゆきたい。

### 3. 推論に対する相反的逆接の“倒”

#### 3-1. 話し手の推論とそれに対する相反的逆接の“倒”

第2節において、逆接の“倒”を二種類に分類できる事を確認した。その分類は同節で見た通りであるが、本節では先に、森中 1998 の言う“倒2”に当たるものを採り上げ、詳論する事にしたい。

まず、このような“倒”を用いた文を改めて見てみよう。従来の工具書や森中 1998 をはじめとする先行研究において採り上げられているのは、以下のように前後両節において二つの事柄が対比されたものである。

(10)

(10) 没吃药, 这病<sup>倒</sup>好了。(吕叔湘主编 1999:153)

(薬を飲まないのに病気がよくなった。)

(11) 本想省事, 没想<sup>倒</sup>费事了。《现代汉语词典》:279

(元々は手間を省こうと思っていたのに、あろうことかかえって手間が掛かった。)

(12) 你越解释, 我<sup>倒</sup>越糊涂了。(史彤春 2004:46)

(あなたが説明すればするほど、私はかえってわからなくなった。)

実例としては、以下のようなものが典型的であろう。

(13) 他们没把她放在眼里, 这<sup>倒</sup>给了她极大的便利。

毕淑敏《拯救乳房》

(彼らは彼女のことなど眼中に無かったが、これは彼女にとってはかえって極めて好都合であった。)

(14) 后来不当老师了, 上网<sup>倒</sup>比从前更勤了, 也是时间多了的缘故。

王海鸰《中国式离婚》

(後に教師になるのはやめたが、ネットを見るのは以前よりずっとまめになった。それも暇が増えたせいだろう。)

このような“倒”の意味の解明に当たって重要なのは、語用論的推論という概念である。森中 1998 や史彤春 2004 等が考察しているように、このような文では、単に前節との対比に対する逆接ではなく、前節から導かれる推論に対する逆接になっている<sup>5)</sup>。例えば例 (10) では、「薬を飲まなかった」という前節の内容に基づいて、話し手は「薬を飲まなかったのなら、病気は良くならないだろう」という推論を遂行する。それに対して、実際の事実は「病気が治った」というものである。そのような話し手の推論とは逆の結果が生じたことを、逆接の“倒”は表すわけである。また、話し手の推論と実際の結果は相反するものである。そこで本稿は、このような“倒”を「推論に対する相反的逆接の“倒”」、または単に「相反的逆接の“倒”」と呼ぶことにしたい。また、上掲 (10)～(12) はいずれも工具書からの引用と先行研究における単独の作例であり、それらにおいてはいずれも先行文脈は存

在していない。そのような文において、前節から推論をすとなれば、それは一般的な通念に対する推論であると考えられる。これは推論に対する相反的逆接の“倒”の特徴の一つと言う事ができる。この点はまた、後述する逆接の“倒”や単文に用いられる“倒”との差異や関連性を考慮する上で重要な特徴である。

### 3-2. 相反的逆接の“倒”の語気

次に、推論に対する相反的逆接の“倒”が表す語気について考察したい。

森中 1998:57 は相反的逆接の“倒”について、以下のような例を挙げつつ、「予想と全く逆の事実が成立した事を強調するので、「意外」「驚き」などの語気を含む」と述べている。

(15) 他比我晚学一年，汉语倒比我好得多。(森中 1998:57)

(彼は私より一年遅く勉強しはじめたのに、私よりずっと中国語がうまい。)

確かに、相反的逆接の“倒”を用いた文がそのような語気を帯びる事はあり得るであろう。実際インフォーマントの語感でも、そのような語気は感じる事ができるという。例えば上掲例 (15) では、通念的には中国語を学び始めるのが遅い者の方が水準は低い筈であり、その通念に反しているという事であれば、意外や驚きといった感情的色彩を帯びるのも頷けることである。森中氏が挙げているのは上掲例 (15) のような作例のみであるが、以下のような文が成立しない事は、この事を裏付けるものと考えられる。例 (16) は上掲例 (15) の“他(彼)”と“我(私)”を置き換えたものであり、例 (17) はその類例として作製した文であるが、いずれも不自然さを伴う<sup>6)</sup>。これはいずれも後節が自分に関する既定の事柄であるため、取り立てて“倒”による意外性を発揮する事が不自然に感じられるからだと考えられる<sup>7)</sup>。

(16) \* 我比他晚学一年，汉语倒比他好得多。

(「私は彼より一年遅く勉強しはじめたのに、彼よりずっと中国語がうまい。」のつもり)

(12)

(17) \* 他再三劝我不去, 我倒去了。

(「彼は私に行かないように再三勧めたが、私は行った。」のつもり)

### 3-3. 相反的逆接の“倒”の後節について

相反的逆接の“倒”を用いる文について、後節的内容的な制約に関して確認しておきたい。森中 1998 は次のような指摘をしている。即ち、“倒 1”を用いた場合に後節が通常望ましい事態を表す内容になるのに対し、“倒 2”、即ち相反的逆接の“倒”ではそのような内容的な制約は見られないというのである<sup>8)</sup>。森中氏自身の挙げる例の前後両節の内容を逆にした例 (18) や例 (19) を見れば、そのことは十分に伺えよう。通念に照らせば、中国語の学習においては上手くなるのが好ましいことであるし、病気は治るのが望ましい。実例としては、例 (20) のようなものが挙げられる。子どもたちを我々の所に預けたのは、しっかり勉強するという望ましい結果を期待しての事であったが、実際には良い事は学ばず、逆に碌でもない事を学んでしまった、という文意である。

(18) 他比我早学一年, 汉语倒没有我这么好。

(彼は私より一年早く勉強しはじめたのに、私ほど中国語がうまくない。)

(19) 吃了药, 病倒没好。

(薬を飲んだのに、病気は良くならない。)

(20) 孩子交到我们手里, 没学倒好, 倒学了这么些乱七八糟的——我们失职啊。 王朔《看上去很美》

(お子さんを我々の所に預けたのに、ちゃんとした勉強はせずに、逆にそんな碌でもない事を学んで——我々は職務怠慢だなあ。)

## 4. 主体に関する逆接の“倒”

### 4-1. 主体に関する逆接の“倒”

次に本節では、森中 1998 の言う“倒 1”を用いた文の成立過程につい

て検討したい。以下の例は呂叔湘主编 1999:154 にあるものであるが、いずれも“表示转折（逆接を表す）”ものと説明されている。

(21) 房间不大，陈设倒挺讲究。

（部屋は大きくないが、家具はなかなか立派だ。）

(22) 剧本的内容一般，语言倒很生动。

（シナリオの内容は平凡だが、セリフはとても生き生きしている。）

このような“倒”は、逆接を表すものではあるが、上述の推論に対する相対的逆接の“倒”とは異なる性質のものである。このような“倒”を用いた文の成立過程を、森中 1998 は推論的逆接の概念を援用し、以下のように説明する。即ち、例 (21) について言えば、「部屋は大きくない」という前提から、「(部屋が大きくないなら) たいした物はないだろう」という話し手の推論が導かれ、それに対して実際には「家具は立派だ」という予想以上により事実が成立したことを述べる。つまり、ここでの“倒”は、複文後節において、前提から導かれる推論に対して反対の事実が成立している事を表すものである。但しこの場合、“倒”を“反而”に置き換えられない事からも分かるように、話し手の推論と後節の内容の対立関係はゆるやかなものである(森中 1998:53-55)。

以下に幾つか実例を提示する。

(23) 家珍坐在床上，头发梳得很整齐，衣服破了一点，倒很干净，我还专门在床下给家珍放了一双新布鞋。 余华《活着》

（家珍はベッドに座っており、髪はきちんと整えられている。衣服は些かぼろくなっているが、とてもきれいだ。私はその上、わざわざベッドのもとに家珍のために新しい布履を置いてあげた。）

(24) 老刘是个使冰镩的行家，小王有的是力气。这活脏一点，倒不累，还挺自由。 汪曾祺《七里茶坊》

（劉さんはアイスピック使いのプロだし、小王は存分に力があつた。この仕事は些か汚ないが、疲れはせず、なかなか自由だった。）

(25) 女同志不便跟着非议领导，含糊糊说：“老何脾气是暴点，人倒是

好人。 王朔《懵然无知》

(女性は続いて指導者を非難するのが憚られて、言葉を濁した：「何さんはちょっと気は荒いけれど、人柄は良い人です。」)

これらの例においても、文の形成プロセスはいずれも上掲例 (21)、(22) と同様に説明できる。例 (23) では、“家珍” が着ている衣服について、前節で「些かぼろい」と言っている事から、「衣服がぼろいなら、きれいでもないだろう」という推論が導かれ、後節においてその推論に反する「とてもきれいだ」という事実が述べられている。例 (24)、(25) の逆接も同様のプロセスによって形成されたものと考えられる。

以上のように、当該文の成立において話し手の推論を介するという森中 1998 の分析は、参照に資するものである。しかしながら、話し手の推論と後節の対立関係が「ゆるやかである」というのは不明瞭な表現であり、また先に見た推論に対する相反的逆接の“倒”との差異が明確でない。

このような“倒”を用いた文を改めて観察してみると、一定の特徴を有するように思われる。上掲例 (21)、(22) のような工具書からの引用にしても、(23)～(25) のような実例にしても、いずれも主語あるは主題に立つ事物に関する性質や性状を述べている事に気付く。当該の事物を主体と呼ぶならば、ここでの“倒”を用いた逆接文は、主体に対する性質や性状を述べるのが典型的と見ることができるのである<sup>9)</sup>。そこで本稿は、このような“倒”を「主体に関する逆接の“倒”」と呼ぶ事にしたい。この特徴を踏まえる事によって、これまで明らかにされてこなかった“倒”の逆接文に関する様々な現象が説明できると本稿は考える<sup>10)</sup>。

#### 4-2. 後節の内容的制約

本節では、主体に関する逆接の“倒”が用いられる節の内容的な制約について考えてみたい。主体に関する逆接の“倒”を用いる節は、通常、話し手にとって好ましいと判断される内容が述べられるという制約が存在する (森中 1998:55-56、呂叔湘主编 1999:154 等)。これまで挙げた先行研究や工具



書からの引用例を見ても、この特徴は明確に見出すことができる。また上掲の実例(23)～(25)を見ても、後節が好ましい内容になるという制約に合致している事が確認できる。各文の後節はそれぞれ、“衣服很干净(衣服はとてもきれいだ)”、“这活不累(この仕事は疲れない)”、“老何的人是好人(何さんは人柄は良い)”という内容である。これらはいずれも通念的に好ましいと判断される内容であり、またそのような判断が文脈的にも適合する。実際、例えば吕叔湘主编1999に挙がっている“房间不大, 陈设<sup>倒</sup>挺讲究。”という文に対して、敢えて前後の節の肯定と否定を逆転した文を作ってみると、かなり不自然であると判断される。

(26) ?? 房间很大, 陈设<sup>倒</sup>一点也不讲究。

第3-3節で述べたように、これは主体に関する逆接の“倒”にのみ見られる制約である。この点については、逆接表現における主観的評価という一般性に合致する事を指摘したい。宇都2006:326-329は、複文における補足注釈の“就是”が通常人物や事物の特性について唯一欠点があるという事を控えめに表すのに用いられる事を明らかにした上で、そこには望ましくない事は控えめに言いたいという原則が働いている事を指摘した<sup>11)</sup>。この原則は、望ましい事は大きく言い、望ましくない事は小さく言うという所謂「楽観原則」の一端である<sup>12)</sup>。本節で扱っている“倒”は、複文の後節において話し手の推論に対する逆接を表すものである。それによってある主体の性状を述べる場合、前節において好ましくない点を先に述べ、重点が置かれる後節において当該の主体に関する好ましい性状を述べるというのは、普遍的な原則に合致するものなのである<sup>13)</sup>。

#### 4-3. “倒”による逆接の成立条件

主体に関する逆接の“倒”を用いる場合の制約は、後節の内容の好ましきという点だけにとどまらない。原1985、森中1998等、幾つかの先行研究で検討されている問題であるが、一見すると逆接を表すように思われる文脈でも、実際には“倒”を用いる事ができないケースが存在する。本節ではこの

問題について、先行研究を踏まえて再検討したい。

以下の例は、いずれも森中 1998 が単独の発話としては不自然なものとして挙げているものである<sup>14)</sup>。

(27) \* 下雨了, 他<sup>倒</sup>没带伞。

(「雨が降ってきたのに、彼は傘をもって来ていなかった。」のつもり)

(28) \* 他闹肚子闹了一个星期, <sup>倒</sup>一直坚持上班。

(「彼はお腹を壊して一週間たつのに、ずっと頑張っていて出勤している。」のつもり)

上掲の二例はいずれも前節と後節を逆接的に接続する事を意図した文であるが、確かに実際には成立しない。具体的に言うと、例 (27) では、「雨が降ってきた」という事と、「彼は傘を持ってきていない」という事実が“倒”による逆接では結びつかないという事を示している。同様に例 (28) では、「一週間お腹を壊していた」という事実と、「ずっと頑張っていて出勤した」という事実が“倒”による逆接では結びつかない事が分かる。「一週間お腹を壊していたのならば、仕事は休んでもよさそうなものだ」というような推論を介せば、後節で“倒”を用いても良さそうなものであるが、実際にはそのようなプロセスは成り立たないわけである。これらの文において、前節と後節がそもそも逆接性を持たないと考えることはできない。以下のように逆接を表す副詞“却”や接続詞“但是”などを用いれば、問題なく成立するからである。

(29) 下雨了, 他<sup>却</sup>没带伞。

(雨が降ってきたのに、彼は傘をもって来ていなかった。)

(30) 下雨了, <sup>但是</sup>他没带伞。

(雨が降ってきたが、しかし彼は傘をもって来ていなかった。)

(31) 他闹肚子闹了一个星期, <sup>却</sup>一直坚持上班。

(彼はお腹を壊して一週間たつのに、ずっと頑張っていて出勤している。)

(32) 他闹肚子闹了一个星期，但是一直坚持上班。

(彼はお腹を壊して一週間たつが、しかしずっと頑張って出勤している。)

また、これらの文が不自然である理由は、後節の内容的な好ましきという制約からは説明が困難である。例(28)のように、通念的には後節が好ましいと考えられる内容であるにもかかわらず、単独の発話としては不自然さを免れないケースも存在するからである。

一方、森中 1998:59、原 1985:8-9 に指摘されているように<sup>15)</sup>、上掲例(27)は単独の文としては非常に座りが悪いが、例(33)のように適当な先行文脈を伴えば成立する。

(33) (不下雨的时候，他天天带雨伞。) 下雨了，他倒没带伞。(森中 1998:59)

((雨が降っていないとき、彼は毎日傘をもって来ていた。) 雨が降ってきたのに、彼は傘をもって来ていなかった。)

上掲例(28)に対する次の例(34)についても同様である。

(34) (他不闹肚子的时候，老请假) 他闹肚子闹了一个星期，倒一直坚持上班。(森中 1998:59)

(彼はお腹を壊していないときはよく休むが、) お腹を壊して一週間たつのに、逆にずっと頑張って出勤している。)

但し、このようなタイプの不自然な文は、単純に何らかの先行文脈を加えればよいというわけではない。例えば以下の例を参照されたい。

(35) ?? 他昨天病了，倒坚持来上课。

例(35)は単独の文としては不自然であり、何らかの先行文脈を必要とするが、彭小川 1999:133 が指摘する通り、以下のように“他学习很刻苦”のような文を加えても、なお不自然さを免れない。

(36) \* 他学习很刻苦，昨天病了，倒坚持来上课。(彭小川 1999:133)

(「彼は勉強熱心で、昨日は病気だったのに、頑張って授業に出た。」のつもり)

この文に対して、方绪军 2004:35 は以下のような先行文脈を加えれば成立することを指摘している。

(37) 他平时不怎么来上课, (可) 昨天病了, [倒]坚持来上课了。(方绪军 2004:35)

(彼は普段は碌に授業に出ないが、昨日は病気だったのに、頑張つて授業に出た。)

なぜ上記のような先行文脈を必要とするのだろうか。この問題意識自体は森中 1998 も抱いているものであるが、その結論は「そのようなコンテキストによって前節から導かれる推論と後文とが明確な対立関係を形成するようになるため」という趣旨のものである(森中 1998:58)。また方绪军 2004:34-35 の分析にしても、採り上げられている例文は異なるが、分析の趣旨は森中氏と同様である。

しかしながら、なお検討すべき問題も残されている。というのも、従来の先行研究では、そもそも推論に対する相反的逆接を構成しない場合に成立の可否が分かれるのは何故なのか、という問題に対して明確な解答が示されていないのである。森中氏の論述に従えば、上掲例 (21) “房间不大, 陈设[倒]挺讲究。” のような文では明確ではないながらも対立関係が認められ、一方例 (27) “下雨了, 他[倒]没带伞。” のような文では対立関係が認められない事になる。繰り返しの問題提起になるが、例 (27) において話し手の推論と実際の出来事との間に対立関係を想定し、“倒” を用いてもよさそうなものである。「雨が降ってきた」という事実に対し、「雨が降ってきたならば、彼は傘をもって来ただろう」という推論を行い、その推論に反して彼は傘を持ってきていない、という実際の出来事を述べる、というように。ところが実際には、そのようにして形成した文は文法的に認められないわけである。すると、「対立関係」というのは一体どのようなものなのだろうか。

本稿は、その理由には文の性質が関連していると考える。即ち、推論に対する相反的逆接を構成しない場合、通常何らかの主体の存在が必要とされるのである。特定の主体についてその性質や性状を述べるという事が予め分

かっているならば、推論すべき内容が絞りやすくなり、前節で述べた内容に基づく推論が遂行しやすくなるため、その推論に相反する結果でなくても“倒”を用いて逆接を表すことができる。逆にそのような主体が無い場合は、前節から導かれる推論と後節とが相反する内容でない限り、“倒”を用いて逆接を表すことはできないわけである。翻って、“他没有穿大衣（今日はコートを着ていない）”、“他坚持来上课（頑張って授業に出る）”といったような文は、ある特定の主体についてその性状等を述べたものではない。したがって、後節の内容と直接的な逆接関係を構成する推論を導く前提が存在しない限り、それらを後節とする逆接の文は、“倒”を用いては作ることができないのである。例えば次の例（38）は前節で当該人物の属性を述べた作例であるが、後節が主体に関する性状を述べた文ではなく、単なる場面的な行為を表したものであるため、やはり容認されない。

(38) \* 他这么怕冷，今天倒没有穿大衣。

（「彼はこんなに寒がりなのに、今日はコートを着ていない。」のつもり）

#### 4-4. “倒”の主観性の表出との関連

本節では、逆接の“倒”に見られる主観性に関わる特徴を指摘したい。その表出の一側面として最も顕著な現象は、他の副詞との共起である。伊地智1970、原1985は、“倒”が“也”、“还”のような婉曲を表す副詞と共起しやすい事を指摘している<sup>16)</sup>。また、方绪军2004:33-34は、上記の副詞に加え、“仿佛”“似乎”のような副詞も共起しやすいことを指摘している。

(39) 老奶奶高身材，驼着背，很瘦弱，身子骨倒还硬朗。

梁斌《红旗谱》

（老婆は背が高く、猫背で、瘦せて弱々しかったが、体はなかなか丈夫だった。）

(40) 虽然想法有点迂，倒也不失为一条好汉。 王小波《黄金时代》

（考え方は些か古臭いものの、好漢だと言える。）

(41) 陈旅长说：“知兄！无事不到我这儿，有什么动用之处？”他看了看墙上的时钟，又说：“今天我还有事情。”（中略）

严知孝抬起头来，看着陈贯群说：“没有什么大事……倒也有一点小事。” 梁斌《红旗谱》

（厳知孝は頭を上げ、陳貫群を見ながら言った：「特に大した事は無いんだが……ちょっとした事があってね。」）

(42) 低着头，他还喊叫那几句话。可是，嗓音已哑，倒仿佛是和自己叨唠呢。 老舍《四世同堂》

（彼はうなだれながらもなおその台詞を叫んでいた。だが、もはや喉がかれており、まるで自分自身に愚痴を言っているかのようだった。）

更に実例を見てみると、これらのほかにも、程度副詞“挺”と共起しやすい事も特徴の一つと認められる。

(43) “那叫双重减号，省得你瞎改。”王五一学习不怎么样，这倒挺明白。

毕淑敏《转》

（「それは二重マイナス記号と言って、みだりに変更しないですむようにしてるんだ。」王五一は勉強は大したことはなかったが、これについてはよく分かっていた。）

以上の諸例に見られるような“倒”は、いずれも単なる逆接という論理関係を表すだけでなく、発話者の語気を表出するものと捉える事ができる。これらの文がいずれも“倒”である事は注目に値する。相反的逆接を表す“倒”には、通常このような副詞の共起は見られない。とりわけ例(39)～(41)のような婉曲な副詞と共起する“倒”は、主体に関する逆接を表すとともに、婉曲な語気を表す役割も果たしていると考えられる。したがって、ここでの“倒”は、逆接という論理関係を表すものでありながらも、より語気副詞に近いものであると見ることができる。

## 5. 逆接の“倒”を用いた文における前後節の交替

ここまで、二種類の“倒”をめぐる問題についてそれぞれ考察してきた。ところで、逆接を表す“倒”について、方绪军 2004:29-33 が興味深い観点からの分析を行っている。方氏は逆接の“倒”を推論的逆接の性質から分類することはしていないが、“倒”による逆接の複文を“p, 倒 q”と表記し、それが二種類のタイプに分けられるという分析を行っているのである。その一つは前節 p と後節 q の内容を入れ替えて“倒 q, p”という形に置き換えられる「可逆逆接文（“可逆转折句”）」、もう一つはそのような内容的な入れ替えができない、つまり“倒 q, p”という形に置き換えられない「不可逆逆接文（“不可逆转折句”）」である。その上で方氏は、両タイプの逆接文について考察を加えている。本節では、方氏の分析を改めて整理し、更に新たな論考を加えたい。

方绪军 2004 よれば、可逆逆接文においては、p はしばしば望ましくない事柄で、q が望ましい、価値の有る面を表す内容になるという。以下の四例はいずれも方绪军 2004:30 からの引用であるが、例 (44) (46) はそれぞれ例 (45) (47) のように前後両節の内容を置き換えることが可能になる由である。

(44) 生意不大，倒也挺红火的。

(商売の規模は大きくないが、なかなか繁盛している。)

(45) 生意倒挺红火的，但并不很大。

(商売はなかなか繁盛しているが、規模は決して大きくはない)

(46) 他虽然不会下围棋，不过别的棋倒还可以。

(彼は囲碁は打てないが、他の盤上ゲームならまああまあできる。)

(47) 他别的棋倒还可以，就是不会下围棋。

(彼は他の盤上ゲームならまああまあできるが、囲碁だけは打てない。)

方氏の論考によれば、“p, 倒 q”にせよ“倒 q, p”にせよ、表現の重点は

(22)

後節に置かれる。両者の論理的意味は基本的に同じであり、いずれの形式を採用するかは主に意味表出の重心と前後の文脈の接続方法によるという。

一方、不可逆逆接文の“倒”構文においては、“倒q”はしばしば望ましくないあるいは消極的な意味の内容になる。これらの文では“反”や“反倒”のような副詞を用いる事ができる（方绪军 2004:31-33）。

(48) 他怎么父仇不报，倒去为虎作伥？（方绪军 2004:31）

（彼はどうして父の仇を取らずに、悪党と結託してしまったのだろうか？）

方氏の分析に従えば、上掲例の“倒”は“反倒”のような別の副詞に置き換えることはできるが、以下のように前後節の内容を置き換えることはできない。

(49) \* 他怎么倒去为虎作伥，而父仇不报？

この指摘は実際の言語事実に合致するものと考えられるが、以下にもう一つ典型的と思われる例を挙げ、これを確認しておきたい。

(50) 在这热腾腾的气氛中，蒋丽莉的心却有点凉。程先生分明在与她接近，她倒觉得是远了。她得到程先生的感情越多就越是不满足。

王安忆《长恨歌》

（このむんむんとした雰囲気の中で、蒋麗莉の心は逆にいくらか冷めていた。程さんは明らかに彼女に近付いていたが、彼女はかえって距離を感じていた。彼女は程さんの愛情が厚くなればなるほど不満だった。）

この例における“倒”は、統語的に“反倒”あるいは“反而”に置き換えることができるものである。この文は以下のように前後の節の内容を交替させると不自然な文になる。

(51) \* 她倒觉得是远了，（可是）程先生分明在与她接近。

以上の考察について、本稿では更に一步考察を深めたい。

方绪军 2004 の分類を改めて検証してみると、方氏の言う“倒”逆接文の



差異は、本稿で言う「主体に関する逆接」と「推論に対する相反的逆接」の差異に相当するものである事に気付く。つまり、逆接関係が明確でなければ前後の節の内容を置き換える事ができ、それが明確であれば置き換える事ができない、という事なのである。

では、そのような現象はなぜ起こるのであろうか。本稿は、ここにも主体についての性状の記述に関する逆接と事柄に関する逆接という差異が反映されていると考える。主体に関する逆接の“倒”を用いた文においては通常、文の冒頭において主体と呼ぶべきものが設定され、それについて前後両節でコメントが加えられるわけである。したがって、前後両節の内容は、順序としてはいずれが先になっても文の成立自体には影響しない。いずれの順序が選択されるかは、当該文脈を踏まえ、「文の重点が後節に置かれる」（方绪军 2004）という点を加味した上で決定されるものと考えられる。一方、推論に対する相反的逆接においては、前節と後節は通常二つの対立する出来事が述べられ、かつそれらの出来事は時間順、もしくは因果関係になっているのが普通である。したがって、文の内容もその順序に従って述べられなければならない、両節の内容を交替する事はできないのである。

なお、方绪军 2004 の以下の認識については、検討の余地があるように思われる。即ち、不可逆逆接文において“倒”を用いた場合、「“倒”を用いた節はしばしば望ましくないあるいは消極的な意味の内容になる」との認識である（方绪军 2004:31）。だが、森中 1998 等の先行研究によれば、推論に対する相反的逆接においてはそのような傾向は認められず、むしろ後節が好ましいかどうかは問題にはならない。本稿はこの点、森中 1998 と同様に、そのような傾向は必ずしも認められないと考える。この点については、以下のような文の対比によっても確認が可能であろう。

(52) 没吃药, 病<sup>倒</sup>好了。

(薬を飲まないのに、病気がよくなった。)

(53) \*病<sup>倒</sup>好了, (可) 没吃药。

## 6. 単文における副詞“倒”との関連性

### 6-1. 単文において一般的通念に対する逆接を表す“倒”

以上、複文において逆接を表す“倒”について考察してきた。本節以降では視点を広げ、単文に用いられる“倒”との関連性を考察してみたい。

まず、推論に対する相反的逆接の“倒”と関係する、単文における“倒”を採り上げたい。単文に用いられる“倒”も一種類ではないが、ここで注目したいのは、以下のようなものである。

(54) 妹妹<sup>倒</sup>比姐姐高。(吕叔湘主编 1999:153)

(妹のほうが姉より背が高い。)

(55) 他用邮票之多，每每教勤务兵惊讶。他的信，十封<sup>倒</sup>有八封是寄往文城的。 老舍《火葬》

(彼が使う切手の多さに、当番兵は毎回驚かされていた。彼の手紙は十通中八通もが文城宛てだった。)

(56) 乔莉香 爸爸，别说了！别说了！我要死！死了<sup>倒</sup>干净！

老舍《归去来兮》

(喬莉香 お父さん、もう言わないで！もういいの！私は死ぬわ！死んだほうがさっぱりするもの！)

本稿が「単文に用いられる“倒”」と言うのは、単なる形式上の分類ではなく、先行文脈を必要としない文において用いられるという意味である。例(54)は工具書、(55)、(56)は実例から採取したものであるが、いずれにおいても当該文の“倒”は先行文脈を承けて用いられたものではない事が確認できよう。具体的に見ると、それぞれ「姉のほうが妹より背が高い」「一人が書く手紙が十通も有れば宛名はばらつくものだ」「生存者のほうが死者より優れている」といった一般的通念が前提として想定され、それに対して一定の逆接性を有する内容が表出されている。つまりこのような“倒”は、一般的通念に対する逆接を表すもの、という事ができる。

史彤春 2004:46 はこのような“倒”を複文における逆接の“倒”と同一に

扱い、話し手の推論と実際の結果とのギャップから、「不思議に思うあるいは受け入れられないという心理が生じやすい」と述べている。確かに、自分の推論と事実とが異なれば、意外であるという心理が生じ得る面はあろう。上掲例(55)では、先行文脈で「“毎毎教勤務兵惊讶”(当番兵は毎回驚かされていた)」という記述がある。だが一方で、例(56)は話し手自身が自殺の決意を表明する場面での発話であり、史氏が言うような心理は必ずしも明確に表れてはいない。それはあくまでも派生的なものであると本稿は考える。本稿がより重要だと考えるのは、このような“倒”が特定の文脈ではなく、話し手が知識として有する一般的通念に基づく逆接を表すという点である。話し手は通念と考えられる事柄を想定し、実際はそれとは逆である事を表明しているわけである。この点は本稿で採り上げた推論に対して相反的逆接を表す“倒”と共通するものである。そのような通念が文脈を介さずに想定される場合は単文で“倒”を用いることができ、先行する節を必要とする場合には、複文において前節から導かれる相反的逆接を表す“倒”を用いることになる、と考えられるのである。

## 6-2. 婉曲を表す“倒”

次に、単文に用いられる以下のような“倒”について考えたい。

(57) 咱俩能一起去，那倒挺好。(吕叔湘 1999:154)

(我々二人が一緒に行ければ、それはなかなか結構なことだ。)

(58) 在院子里养点儿金鱼儿，种点儿花儿，倒很有意思。(吕叔湘 1999:154)

(庭で金魚を飼ったり、花を植えるというのは、なかなか面白い。)

(59) 竖日清晨他醒来后发现新娘传说般地消失了，他惊慌的寻找一直持续到打开那扇柜门为止，我赤裸的祖母在衣柜里瑟瑟发抖。

他人倒不坏。这是我祖母对他的最终评语。 余华《在细雨中呼喊》

(あの人はまあ悪い人ではない。これが私の祖母の彼に対する最後の評言だった。)

例 (57)、(58) は工具書からの引用であり、先行文脈は存在しない。いずれもある事柄を主題として提示した上で、それらについて肯定的な評価を述べているものである。また例 (59) は、段落冒頭の一文において“倒”が用いられている例である。ここでは“他(彼)”という一個人の人となりが問題とされており、それについて“不坏(悪くない)”という評価を下している。これらの文に用いられている“倒”は、一般的通念に対する逆接を表すのとは異なるものである。いずれの文においても、直接程度副詞と形容詞を用いるのではなく、その前に“倒”を用いる事で、当該の評価を和らげる作用を果たしているのである。このような“倒”は、話し手の判断を婉曲に表したものと考えるのが適切であると思われる。そこで本稿では、このような“倒”を「婉曲の“倒”」と呼ぶ事にする。

婉曲の“倒”は、典型的には単文に用いられているという統語的な特徴において、先述の単文における逆接の“倒”と共通していると言える<sup>17)</sup>。異なるのは、“倒”が持つ程度性の有無である。原 1985 も指摘するように、このような“倒”は、程度が軽い事を表す“还”や婉曲な語気を表す“也”等と共起しやすい<sup>18)</sup>。

(60) 他觉得这倒也怪无拘无束的悠闲自在。 老舍《四世同堂》

(彼はこれもなかなか自由気ままなものだと思った。)

(61) 庞四奶奶 唱唱那套词儿，还倒怪有个意思！ 老舍《茶馆》

(龐四婆さん そういう歌詞を歌ってみるのも、なかなか面白いね！)

(62) 配上点花纸的糖，红盒的葡萄干，也倒还象个摊子。

老舍《牛天赐传》

(柄ものの紙にくまれた飴や赤い箱の干し葡萄も、なかなか露店らしかった。)

即ち、話し手が話題の対象となる人物や事物の性質あるいは性状について一定の評価基準を抱いており、実際には充分満足するほどではないものの一応適っている、という事を表現しているものと考えられる。また、その評価

はいずれも肯定的と捉えられるものである。この点は上掲の各例からも確認する事ができる。

このような婉曲の“倒”は、複文における主体に関する逆接の“倒”との関連性が認められる。即ち、ある主体について、“倒”を用いて単独の評価を行なった場合は本節のような婉曲の表現となり、複文において“倒”を用いて性状を述べた場合には、往々にして前節が好ましくない或は否定的な内容になり、後節が好ましい或は肯定的な内容になるのである。ここに見られる“倒”の関係は、上述の単文における逆接の“倒”と相反的逆接の“倒”との関係と平行性を有するものである。

## 7. おわりに

本稿では、逆接の“倒”を二種類に分けた先行研究を踏まえ、後節が推論的逆接と相反的な対立関係を形成する“倒”と、ある主体についてその性質や性状を述べる“倒”という分類を改めて行ない、それぞれの“倒”について考察を加えた。具体的には、前者を「推論に対する相反的逆接の“倒”」、後者を「主体に関する逆接の“倒”」と呼び、語気や主観性の表出の有無、“倒”が用いられる後節の内容的な制約の有無、前後両節の内容の交替の可否等、両者の特徴を詳論するとともに、その差異を明らかにした。また、単文において用いられる副詞“倒”との関連性に視野を広げ、前者と単文における逆接の“倒”、後者と婉曲の“倒”がそれぞれ関連性を有する事を指摘した。

本稿では、本稿で扱った二種類の“倒”の間の直接的な意味的関連性、逆接と婉曲以外の副詞“倒”の意味的な関係性といった問題については、十分な考察を加える事ができなかった。これらの問題については稿を改めて研究を継続したい。

### 注

- 1) 呂叔湘主編 1999 の日本語訳については、牛島徳治・菱沼透鑑訳 2003 を参照した

上で、引用者が改めて訳出した。また、先行研究の例文の日本語訳は原則として当該論文の訳文を引用したが、一部修正を加えたものもある。いずれも不備は当然本稿筆者の責任である。

- 2) 例文には原則として全て訳文を附したが、一部下線部のみ訳出したものもある。
- 3) 逆接以外の副詞“倒”の意味・用法についても、考察すべき重要な問題は多いが、非常に多岐に渡るので、本稿では関連するもののみ必要に応じて言及することとし、それ以外の具体的考察は別稿に譲りたい。
- 4) 他に、朱景松主编 2007:101 の“倒”の項でも、例 (9) のようなものを“反而、却”の意味を表すもの、例 (8) のようなものを逆接を表すものとして区別している。しかし、同書における記述では二種類の“倒”の意味的差異は判然としない。
- 5) 推論的逆接については、渡辺 1995 も参照。
- 6) 例文冒頭の記号は、当該文が成立しないことを表す。また、例文冒頭の疑問符は、当該文が不自然であることを表す。
- 7) なお、後節の内容が話し手自身に関する事であっても、以下のように話し手の強い願望を表明するような文ならば成立する。

(63) 他再三劝我不去，我倒很想去。

(彼は私に行かないように再三勧めるが、私はとても行きたい。)

したがって、自分に関する事であっても、通念的に前節から導かれる推論が想定できれば、逆接の“倒”を用いるのは可能である事が分かる。

- 8) 吕叔湘主编 1999:154 は、逆接の“倒”の後方には積極的な意味を表す語句が用いられると述べている。だが吕氏の言う逆接とは本稿でいう「主体に関する逆接の“倒”」であり、本節の採り上げている逆接の“倒”を用いた文においては、後続するのは必ずしも積極的あるいは肯定的な意味のものには限らない。
- 9) 侯学超编 1999:134 は副詞“倒”の意味項目の一つに“同一件事、同一主体的两个方面不一致(对立)(同一の事、同一の主体の二つの面が一致しない(対立する))”という記述をしており、本稿の見解と一致する。但し同書はそのような“倒”を用いた文の成立過程や特徴を具体的に分析してはいない。
- 10) 但し、本節で扱うような“倒”を用いた文が全てそのような特徴を有するとまでは言い切れない。例えば以下の例では、上述の推論に対する相反的逆接の“倒”の典型的なタイプではないが、しかし特定の主体を設定して、それについて述べた文とも捉えられない。

(64) “丁丁怎么办?” “带上。” “对，带上。……饭还没做，我倒不饿，你吃了没有?” 王海鸰《牵手》

(「丁丁はどうするの?」「連れて行く。」「そう、連れて行くのね。……ご飯はまだ作ってないけど、私はお腹が減ってないのよね。あなたはもう食べたの?」)

このような“倒”は、相反的逆接の“倒”と主体に関する逆接の“倒”との中間に位置するものと考えられる。このような“倒”の位置付けの詳細については、稿を改めて考えたい。

- 11) 具体的な例は以下のようなものである。

(65) 你父亲可真是好人哪，就是不大会做生意，啊，不大会做生意。

老舍《二马》(宇都 2006:314)

(お前の親父さんは本当に良い人じゃが、ただ商売が不得手じゃな。ああ、商売が不得手じゃ。)

- 12) 「楽観原則」については、沈家煊 1999:187-188 参照。

- 13) 但し、主体の性質や性状について述べた逆接文であれば、必ずこのような内容の好ましさを制約が生じるわけではない。なぜ主体に関する逆接の“倒”に限ってこのような制約が見られるのかという問題については、“倒”の文法化プロセスも視野に入れた考察が必要であると思われる。この点は今後の研究課題としたい。

- 14) 森中 1998 は、先行研究を踏まえて以下の例 (66) 等幾つかの例を挙げているが、いずれも例 (27)、(28) と同じタイプの例と見て差し支え無い。

(66) \*今天这么冷，他倒没有穿大衣。(原 1985:8)

(「今日はこんなに寒いのに、彼はコートを着ていない。」のつもり)

- 15) 原 1985 は事実の指摘にとどまり、その理由については探究を加えていない。

- 16) “还”、“也”ともに多義的な副詞であるが、以下の各例からも明らかなように、“倒”と共起するのはいずれも程度の軽さや婉曲を表すものである。第 6-2 節参照。

- 17) 実際、婉曲の“倒”と単文における逆接の“倒”とは互いに隣接するものと考えられる。以下の例 (67) の“倒”は、“算”と共起して婉曲を表すと同時に、「現在は仲の悪い夫婦だ」という前提から導かれる「結婚当初も仲が悪かったのだろう」という推論に対する逆接を表すものと捉えられる。

(67) “…… ‘这小两口刚结婚的时候倒算和美，有几个刚结婚时不和美呢？新鲜劲儿嘛。打去年下半年起这小两口开始别扭了，……。’” 王朔《枉然不供》(『この若夫婦も結婚したばかりの頃はまあ睦まじかった。結婚したの時に仲が悪く夫婦はそうでもないもんだ。新味があるからね。去年の後半から二人はそりが合わなくなってきて、……。』)

- 18) 伊地智 1970:100 は、“倒”と“也”“还”が共起する際の統語的な位置関係について、“也倒”“还倒”という形式が基本であり、“倒也”“倒还”という形式は例外例といわざるを得ない、という認識を示している。だが、原 1985 も言及しているように、実例においては“倒也”“倒还”という形式も決して少なくない。

#### 参考文献

- 方绪军 2004 「表示转折的“倒”和“却”」『语言科学』第3卷第5期
- 郭志良 1999 『现代汉语转折词语研究』(北京语言文化大学出版社)
- 侯学超编 1998 『现代汉语虚词辞典』(北京大学出版社)
- 吕叔湘主编 1999 『现代汉语八百词(增订本)』(商务印书馆)
- 彭小川 1999 「论副词“倒”的语篇功能——兼论对外汉语语篇教学」『北京大学学报(哲学社会科学版)』第5期
- 沈家煊 1999 『不对称和标记论』(江西教育出版社)
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编 2005 《现代汉语词典》第5版(商务印书馆)
- 朱景松主编 2007 『现代汉语虚词词典』(语文出版社)
- 伊地智善継 1970 「副詞分類の原理について」伊地智善継研究代表者『中国語学論集』(科学研究費研究「現代漢語の語法史的研究」報告書)(文部省)
- 宇都健夫 2006 「“就是”と“只是”——補足注釈機能について——」『中国語学』第253号(日本中国語学会)
- 呂叔湘主編、牛島徳次・菱沼透監訳 2003 『中国語文法用例辞典』(東方書店、2003年改訂版)
- 史 彤春 2004 「語氣副詞“倒”の語用論的分析」『中国学志』臨号(第19号)(大阪市立大学中国学会)
- 原由起子 1985 「語氣副詞“可”と“并”“倒”“却”」『中国語学』第232号(中国語学会)(本稿の引用は原由起子『中国語における修飾の様相』(東方書店、2002)の再録による。)
- 森中野枝 1998 「中国語の副詞“倒”について——“却”との比較を通して——」『中国語学』第245号(日本中国語学会)
- 渡辺 学 1995 「ケレドモ類とシカシ類——逆接の接続助詞と接続詞——」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』(くろしお出版)